

「旅の図書館」一時閉館

2015年（平成27年）9月30日、公益財団法人日本交通公社「旅の図書館」は、来年のリニューアルに向けて一時閉館いたしました。これまでご利用いただきました皆様には心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

当館は、2016年（平成28年）9月をめぐりに、南青山に移転いたします。

「旅の図書館」（開館当時の名称は「観光文化資料館」）は、1978年（昭和53年）10月、東京駅から程近い八重洲の第二鉄鋼ビル1階に開館以来37年間、おかげさまで約87万人の皆様をお迎えしてまいりました（2015年9月末日現在）。

1996年（平成8年）、第二鉄鋼ビル地下階へ移転、2012年（平成24年）には、八重洲ダイビル地下1階へと2回の移転を経て今日に至っ



第一鉄鋼ビル1階にオープンした観光文化資料館

ています。このたびは、約1年の閉館期間をいただき、リニューアルプロジェクトに取り進むことになりました。当館を運営する公益財団法人日本交通公社本部の南青山への移転に伴い、調査研究部門と旅の図書館を一体化させ、観光分野における調査研究活動とライブラリ機能の融合



1985年 館内の様子

する新たな創発の拠点づくりを目指します。

具体的なりニューアルの内容については、今後本欄およびホームページなどで発信してまいります。

これまでの歩み

1978年（昭和53年）、当館は「テーマのある旅を応援する」図書館として、豪華写真集を中心とした約4000冊を主な蔵書として公開し、

ゆったりとくつろぎながら旅の雰囲気味わっていただくところからスタートしました。

その後、旅行の下調べに必要な図書を「というご要望に応え、日本各地、世界各国の旅行ガイドブック、地図、時刻表、旅行関連雑誌、紀行文など旅行・観光に関する資料・情報の収集に力を入れ、具体的に「旅行に役立つ」資料を充実させました。

1976年（昭和51年）創刊の機関誌『観光文化』では、実際に図書館にご照会いただいた事例から興味深い旅の方法やテーマなどを選び、文化的、専門的な旅の情報提供といった発信も行ってまいりました（別冊『観光文化と旅』1978年〜84年）。

こうして蔵書数、利用者数は増加し、多い年（1995年〔平成7年〕）には年間約3万7千人の皆様にご利用いただくようになりましたが、1996年（平成8年）の地下階への移転をきっかけとして、利用者数は減少しました。地階となったため、通りがかりの利用者が減った

ことが大きな要因ですが、インターネットの登場により、旅先の基礎情報は比較的簡単に入手できる時代となり、当館に求められる役割が変化したものと思われれます。

当館利用者アンケート調査から利用目的について見ますと、2009年(平成21年)の調査では約7割が「旅行の下調べ」(個人的な旅行62%、仕事関係の旅行7%)と回答されたのに対して、2014年(平成26年)の調査では「旅行の下調べ」は42.5%と減少しています。

しかし滞在時間が延びる傾向などからより目的的な利用スタイルに変化したようです。

2002年(平成14年)には専門図書館協議会へ加盟するなどして、今日、図書館に求められる専門性などについて模索しながら、「旅の図書館講座」など、図書館を会場とするセミナーや講座の開催、蔵書の中からテーマを決めての特別展示なども始めました。

最近では、特に観光研究の専門書や学術書の収集に力を入れ、貴重な資料のデジタル化や古書・貴重本の閲覧の開始、学術ジャーナルの購読・

公開などさまざまな取り組みでまいりました。また2014年(平成26年)からは「たびとしょ(Cafe)」として、閉館後の図書館を利用して、少人数でゲストを囲み、双方向の情報・意見交換のできるミニ研究会を主催しています。手探りながらこうしてさまざまに取り組んだ結果でしか、2014年度は再び年間利用者数が微増するなど、手応えを感じているところです。

当館は、先達から託された理念を大切に継承しつつ、時代の要請に沿って新しい姿となり、引き続き観光文化の振興に寄与すべく、運営してまいります。

明年2016年(平成28年)、調査研究部門資料室との一体化により、当館の蔵書数は現在の約3万5千冊から約6万冊(非公開資料含む)となります。観光による地域の課題解決に向け日々、調査・研究に取り組んでいる当財団研究員とともに、観光研究を軸とした交流、創発の場としてご活用いただける専門図書館を目指します。

(旅の図書館長 久保田美穂子)

所蔵図書紹介

観光地として名高い聖地には信仰心とは無縁の人々が数多く足を運び、宗教と直接関係のない場が「聖地」と呼ばれるようになり、関心を集めている。本書「聖地巡礼 世界遺産からアニメの舞台まで」(岡本亮輔著、中公新書)が取り上げるのは、カトリックの聖母出現、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼、世界文化遺産に指定された聖地、オカルト文化が生み出した聖地、パワースポット、アニメ聖地巡礼など、現代社会の中で生まれたさまざまな「聖地」である。そこから著者は、「現代社会では聖地巡礼と観光が混ざり合い、それぞれ社会の中で位置づけ直されている。そしてその結果、従来の宗教研究や観光研究の枠組みでは捉えきれない変容を生じている」と論じる。



新書判 240ページ
定価 780円
中公新書
(2015年2月発行)

これまで、主として観光の現象として研究されてきた「聖地巡礼」研究とは異なる宗教学、宗教学会を専門とする著者の丁寧な考察は、現代における宗教と観光との関わり方の深さやその意味を読み解く上で多くの手掛かりを与えてくれ、読み応えがある。

(大隅)



四六判 280ページ
定価 1,500円
東洋経済新報社
(2015年6月発行)

2003年(平成15年)に「観光立国」が宣言されてからすでに10年以上経過する。昨年は訪日外国人も年間1300万人に激増して盛り上がりを見せている。だが、「新・観光立国論—イギリス人アナリストが提言する21世紀の「所得倍増計画」」(デービッド・アトキンソン著、東洋経済新報社)の筆者は、まだまだ少ない、日本の潜在力が発揮されていない、人口減少の時代になるなら、訪日外国人を「短期移民」として捉え、国内消費を促すには、観光は最善策であると言いつける。観光立国4つの条件、気候、自然、文化、食事は日本には全てある。あとは、外国人のしたいことを理解してきめ細かいアピールの仕方を工夫すればいい。真に観光立国を目指すなら、ゴールデンウィークを廃止して「大量の観光客をさばく」という供給側視点からの対応をやめるべきとも明言する。「おもてなし」を求めて外国人が訪日しているというわけではない。むしろ外国人がお金を払ってでも利用したくなるようなサービス提供を考える必要があるかもしれない。

(片桐)